

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

人文・社会科学系の諸学問は、現在、国際的な学术交流なくして未来が展望できないような状況にあり、中国・韓国と連携した共同研究が急速に進んでいる。本論文はそうした研究動向に敏感に反応しつつ、中国と日本の昔話における異類婚姻譚を比較検討したものである。東アジアには人間と神様・妖怪・動物・植物といった異類との結婚を主題とした昔話が豊富にあり、世界的に見ても、この地域の昔話を特色づける重要な要素になっている。これまでそれぞれの国で、個別の話に関する研究は重ねられてきたが、このテーマに焦点を当てて総合的な比較研究がなされることはなかった。そうした研究状況を認識した上で、母国の中国と留学先の日本に絞って比較検討するための研究環境は十分に整っており、それを最大限に生かした視野を持つ論文としてまとめられた。その成果はこれまでにない独創性を持ち、研究対象とした中国・日本のそれぞれの学界に寄与するだけでなく、世界に対しても研究の意義を説くことができるものになっている。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文は、大きく、「第1部 中日昔話における異類婚姻譚の比較」と「第2部 中日文献記録と異類婚姻譚」に分かれている。第1部は20世紀に中国と日本で採集された口頭伝承による昔話の異類婚姻譚を研究の対象にしており、第2部は19世紀以前の日本と中国で執筆された文献記録に残る異類婚姻譚を研究の対象にしている。これまでの学問との関係で言えば、前者は民俗学的方法による共時的な研究であり、後者は国文学的方法による通時的な研究であると言えることができる。しかし、21世紀に入ってから学問の専門化と細分化が進んだために、民俗学と国文学は隣接する分野にありながら、学术交流はまったく見られなくなってしまった。そうした状況を考えるとき、本論文は、研究対象を昔話の異類婚姻譚に絞ったものであるにせよ、現在の学問に感じられる閉塞感を打開してゆくような先端的研究であることは間違いない。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

中国と日本の比較研究を進めるには、両国の学問に精通していなければならない。その点、中国出身であるという利点を生かして国内の文献を渉猟するとともに、留学してきた日本でも古典文学の研究はもとより、民俗資料にもよく目を通している。加えて、全国規模の学会である日本口承文芸学会や日本昔話学会をはじめ、各種のフォーラムやシンポジウムに出席して人間関係を構築し、最新の情報を得る努力を重ねてきた。本論文は、そうした資料収集にもとづき、先行研究を踏まえて、慎重で適切な分析がなされている。巻末の「参考書目」に入れられた中国語資料・日本語資料が充実していることが、何よりもよくそれを示している。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

「第1部 中日昔話における異類婚姻譚の比較」は、共時的な分析を経て歴史を遡ろうとするものであり、4章から構成されている。第1章は、中国から七夕伝説が渡来した際、天の川がかんざしによる切断によって生まれたとする話から、瓜から流出した水によって生まれたとする話

に改変されたことを指摘した。第2章は、中国の「田螺女房」が東南沿岸で発生して全土に広まり、朝鮮半島に伝播したが、日本は沖縄までしか至らず、一方、「魚女房」「貝女房」は貴州省から沖縄を經由して日本に伝来したことを述べた。第3章は、中国の「蛇郎」と日本の「蛇婿入り」を比較し、雲南省に多い「蛇婿と姉妹型」が沖縄・奄美まで渡来したことを明らかにした。第4章は、中国の「蛙婿」と日本の「田螺息子」を取り上げ、一般の異類婚姻譚と違って、結婚後異類が人間に変身して幸福になることを指摘した。また、「第2部 中日文献記録と異類婚姻譚」は、通時的な分析を経て現代に近づこうとするものであり、3章から構成されている。第5章は、中国の『搜神記』の影響を受けた『善家秘記』において、日本の「狐女房」に男をたぶらかす女性像が生まれたことを明らかにした。第6章では、お伽草子の『浦島太郎』は、先行作品を受け継ぎながらも、竜宮と不老不死の思想については中国の文献記録の影響を受けていることを指摘した。第7章は、中国の『聊齋志異』とお伽草子の『かざしの姫君』から菊の精の婚姻譚を取り上げ、異類の人物造形の違いがそれぞれの国の菊のイメージを反映していることを述べた。こうした分析を経て、昔話の異類婚姻譚は中国の南方から沖縄を經由して日本へ来た可能性が高く、その基盤に稲作文化があることを説いた。さらに、中国では異類を排除せずに幸福な結婚を語るが、日本では異類を排除したために結婚は破局する傾向があることを論じた。これに対しては、形態分析や構造分析からのアプローチはできないか、伝説では子供が生まれることをどう考えるかといった疑問点がないわけでない。だが、国際的なタイプ・インデックスに則って、モチーフに注目することで明らかになった点は多く、その成果は学術的な水準に達している。このうち2章は日本口承文芸学会と日本昔話学会で口頭発表し、ともにレフリーが認める学術論文として学会誌に掲載されたことが十分に証明している。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文は、中国・日本のそれぞれでこれまで個別的に進められてきた異類婚姻譚について、両国の研究成果を踏まえながら、共時的かつ通時的にその全体像を示したものである。しかも、資料を収集して分析を行う研究方法は、民俗学と国文学の両方から良質なところを学び取っており、従来の研究には見られない総合的な研究となっている。今後、中国・日本のそれぞれにおいて昔話における異類婚姻譚の研究を行う際には、必ず拠り所にしなければならない研究であることは間違いない。そうしたことから考えて、審査委員5名は全員一致で、本論文を「博士(学術)」の学位を取得するにふさわしい論文であると判断した。